

今まさに時代・学びの転換点

“森林文化アカデミー”という取組

岐阜県立森林文化アカデミー

竹島 喜芳

●森林文化ってなんだろう

森林文化アカデミーに入学してきた学生さんに毎回授業で尋ねることがある。「森林文化ってなに?」だ。すると十人十色の答がかえってくる。結局のところ、みなで共有できるのは、「森林文化」ってよく分からない、ということ。森林文化がよく分からないなら、森林文化を維持していくための方法にも「決め手がなく」、決め手もないまま「森林文化の維持に貢献する人材を育成するカリキュラム」を考えようとするれば、そこには大きな無理がある。では、森林文化アカデミーではどんな教育を一致団結して行うべきだろう。その先に見えるのは深い霧…。少し前まで、私はそんな風に考えていた。ところが、最近徐々に霧が晴れてきた。

●時代の転換点

ところで、25年くらい前の機動戦士ガンダムというアニメをご存知だろうか。宇宙戦艦ヤマトで宇宙に興味を持った私は、ガンダムも宇宙ものの1つとして“モビルスーツ”が繰り広げる戦いに釘付けだった。あれから25年以上経っているが、ガンダムの熱狂的なファンが学生がときどき入学してくる。もちろん彼らはリアルタイムでガンダムを観ていたわけではない。彼らを惹きつけるガンダムの魅力はなんだろう。そう思っていたころ、ちょうど衛星放送で再放送があった。そこで25年ぶりにガンダムを観てみた。すると、そのアニメの「リアリティ」や「物語の複雑な構成」に全く驚いた。とはいうものの、私的には、その高度なリアリティにも残念なことが1つだけあった。戦艦を任されている管理者(チャー)が、戦艦を部下に預け、自分がモビルスーツに乗っかり、戦いの最前線に出て行くことだ。現在の戦争や、会社組織で、組織のトップが全体の指揮管理をほっという、現場の戦闘・営業現場に出かけていくなどとは考えにくい。

そんなことを考えていたころ、三国志の「赤壁の戦い」を題材にした『レッドクリフ』という映画が上映された。私は映画館でハッとした。あの時代は組織のトップ(関羽・張飛・張雲)が、戦闘の最前線に飛び込んでいく時代だったのだ。三国志とガンダムとの間に大きな違いをもたらしたのはなんだったのか?私は「飛び道具(鉄砲)」の出現だと思っている。



©創通・サンライズ



©2008 Three Kingdoms Ltd. ©Bai Xiaoyan

●時代の転換点と教育のあり方

世の中に革命的な道具が普及するとき、それにともない、社会のありようも変わり、身につけるべき素養・知識・技術は大きく変わる。新しい道具の出現で、華々しく活躍していたヒーローはオールドタイプとなり、まるで晩秋のコオロギのように、時代から人知れず消えていく。そしてニュータイプの出現。やがて万人はニュータイプになるための教育を受けることになる。

さて、“現在”になにか新しい革命的な道具が普及していないかと思渡してみる。すると鉄砲の出現以上の大きな道具がすでに浸透しているのではないか。インターネットに代表される情報処理ツールだ。この道具の出現によって人間活動は大きく変わった。インターネットの出現で人間は覚えることから開放されたのだ。知らなかったこともインターネットで検索すればフォローできないほど多くの情報が得られる。しかも最新の…。10年前なら、自分が必要とする内容にぶち当たるまで、何冊もの厚い本を読みまくらなければならなかった。

それにともない時代は、教育にも変化を求めているはずだ。では、時代の要求とは何であろう。私は次のようなものではないかと考えている。これまでのように「成功事例や既存の知識を理解・吸収し、それを実践できる準備をする」スタイルの学習から「なにげない毎日の中で問題に気づき、情報ツールをつかって臨機応変に情報収集し、溢れる情報から必要な情報を取り出す。そして、それら既存の情報を使って新しい情報を自ら生み出し、問題解決方法を創造し、検証、実行する」技術を学習するスタイルへの変革だ。

●“森林文化”アカデミーの教育

加えるならば、さらに閉塞感のある現代は「こうしたら、うまくいく」という処方箋がもはや効かなくなった暗澹たる時代だ。この時代の閉塞感から抜け出す扉は、これまでのような、先に見えている皆で目指す1つの大きな扉ではなく、無数の未発見の小さな扉ではないだろうか。この未発見の扉はどうしたら開くのだろうか?それには、各人が自分の立ち位置から、失敗が大きな社会的影響を与えない程度の小さな取組を、あきらめずに続けていくことだと、私は思っている。

さて、大きな道具の出現によって教育方法は変革を迫られ、さらには目の前に正解がない現代、森林文化というわけのわからないイメージに集い、多種多様な取組をしながら、それぞれが「問題発見とその解決方法の発見」に試行錯誤しているこの学校は、ある意味、時代の先端をいっているのかと思う。

なお、そんな学校の中で、私は「IT技術をつかった林業振興」を専門に考えているが、最近では、こうした時代の移ろいを踏まえた林業の将来像を考え始めた。自らは「スーパーマクロ林業」といっているが…。またどこかでそんな竹島節をご披露できたらと思う。